

舊稿より : 短歌

著者	岩永, 武夫
雑誌名	龍南
巻	2 1 7
ページ	1 2 - 1 3
発行年	1931-03-01
その他の言語のタイトル	旧稿より : 短歌
URL	http://hdl.handle.net/2298/7007

舊稿より

岩 永 武 夫

友の死

ひた待ちし友は來らず悲しき報つきにける朝秋曇りせり

教室の重き沈黙にかそかなる溜息きいて心ゆるめり

友と二人來なれし卓に一人來て餅はみにけり茶ものみにけり

雨ふりて虫の音細る秋の夜に一人眼ざめて友を思へり

秋冷えの夕はるく友の墓に尋ね來れば人のかげなし

おくつきはしづかなりけりぬかづきて友の名よべど冷たき石碑

墓石の塗土未だ乾き果てず蟻の四五匹はひ廻れるあはれ

はからずもふた七日目に行きあひて佛壇に線香立てて來にけり

阿蘇行二首

露しげき畔道に立つ農夫等の鎌に朝日子かがやきそめつ

さびしさもいつか忘れぬ我を見てそひ來る手に草はませ居れば

前の屋並みの朝戸くる音なりやみて障子にうつる淡き日のかげ